

【優秀賞】

一枚の写真

祐仙淳子・大阪府

初めて街を訪れた時には、誰でもふと感じるその街特有の色と匂いがあるものだ。それがイメージとなつて心に残る。海辺の街には潮の香りがして、山村には萌える緑の匂いがするといった風に。

わが街・泉大津では、のこぎり屋根の建物が風景となり、マンホールの絵柄には機織り・ヒツジなどが彫り込まれ、企業の門には「何某毛織」といった看板がいたるところに見られた。それがこの街の景色だった。よそから訪れた者には、毛織や毛布の柔らかく暖かいイメージが感じられたものだ。小さな子供などは、街のあちこちにあるヒツジの像やモニュメントを見て、本物のヒツジがどこにいるのかと質問したりする。すると、それはこの街で毛布なんかを作っているシンボルで、羊の毛で作っていたから、と大人が教える。

しかし、十数年あまり前からのこぎり屋根の風景がどんどんと姿を消し、マンションやビルに景色が変わっていった。それと共に匂いが薄れていくようで残念な気がした。子供を連れて図書館や「織編館」という資料がある場所に行けば、昔の機織り機が展示してある。それを見て「ふーん、こんな風に織物するんだ」といった感想で終わってしまう。

だが現在も、国内の毛布総生産量の九割以上は実際にこの街・泉大津で生産しているのである。グローバル化で、安い海外製品が巷にあふれていると云えども、日本製毛布のほとんどは、いまだこの街で作っている。

その毛布が、私たちの心に明かりを灯すことがあった。

昨年三月に東日本大震災が日本を襲った。泉大津でも、パトカーが津波警報を知らせて走り回り、テレビから流れてくる画像は経験したことがないような光景を映し出す。日本はどうなるのだろうという不安と、被災地の方達の様子に心を痛めていた時の事だ。泉州地域として迅速に毛布等の緊急救援物資を搬送したと発表があった。東北の三月は雪が降り、避難所はさぞや寒いであろう。水や食料とともに、毛布は命の綱である。三月十五日に搬送するところを写した一枚の写真は、自分たちは何をすべきか何ができるかと、心を痛めていた多くの市民の気持ちをも救う知らせとなつた。気持ちを代弁してくれた、この素早い行動を、私は「ありがたい」と心から思った。自分で毛布を製造している訳でもなく、その何かに携わっている訳でもないのに、この街に感じられた毛織や毛布の暖かいイメージが、その写真で大きく蘇ってきた。

それから一年経つて、ある毛織会社を見学させていただく機会があった。今まで外から想像していたイメージとは大違いで、近代化された機械工場は美しく管理が行き届いていた。いつも牧歌的に眺めていた「のこぎり屋根」が、中から見るとあれほど明るく、採光の工夫がなされていたとは知らなかつた。百聞は一見にしかず、である。昔は牛の毛で毛布が出来ていた歴史や、カシミヤの風合いをどのような工程で作り上げていくのか等「ほうつ」と感心するような事ばかり。私も「ヒツジはどこにいるの」と聞く子供と変わらない程度の認識だ。そう思つて資料を繰つてみると、ふと一枚の写真が私の目を奪つた。折れそうに腰の曲がつた老女が、手回しの糸紡ぎの前にちょこんと座つてこちらを見つめている。セピア色をした写真の、老女のその眼差しは、時代を越えて私に何かを語りかけているように感じられた。朝から晩まで糸を紡いで年を重ねた、この会社や街の原点と歴史が、その老女の眼差しにこもつていてるようだ。なぜかその写真を前に、厳肅な想いが突如込み上げてきたのだ。

一枚の写真が語りかけるものは、見る人によつて違うかも知れない。しかし「時」を閉じ込めて保存された写真は、見る人に出会つた瞬間から無数の言葉を発し始める。そしてそこから、歴史や想いが伝わつてくる。

私は泉大津の街が好きだ。初めてこの街に来た時の風景や色や匂いが、イメージとして心に残つていたから。そしてこの二枚の写真に出会つて、それは再び強く蘇つてきた。

実際のヒツジはこの街にいない。動物園やヒツジ牧場がある訳ではない。しかし、いたるところに見られるヒツジたちは、その優しい姿で心を和ませてくれる。ある時、そうした泉大津のモニュメント全てが写真で示された地図を貰つたので、それを手に街を探索してみた。この街の海辺にも、道路にも、街並みにも、泉大津全体にヒツジたちが息づいているのを知り、改めて大きな驚きを覚えた。

自分たちが住む街を愛する、またこの街に来てくれた人たちに素敵なところを知つてもらう・・・、それはこの街の多くの先人達が築いてきた道のりを知り、誇りに思えてこそ生み出されるのではないだろうか。二枚の写真によつて、蘇つてきたこの街のやさしい匂いと温かい息吹。それは、大切に守り伝えていきたい街の宝だと思つた。